

「瓢々録 -士郎回想-」 特集

平成18年1月17日～平成18年7月2日



『瓢々録』中表紙 (題字：川端康成)

尾崎士郎記念館

「瓢々録 - 士郎回想 -」特集

『瓢々録』は昭和39年(1964)2月19日、享年66歳で逝去された士郎さん一周忌にあたり、妻清子さんが士郎さん生前からの多くの友人、知己の方々に故人回想の玉稿ぎよつこうをお願いした追悼録です。

「尾崎は人に好かれ過ぎるといのが唯一の欠点のような男でした。」と宇野千代さんが言っていたように、137名の方々がそれぞれの筆致で思い出深い士郎さんを偲んでいます。

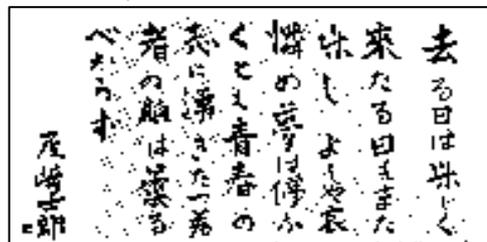
今回の特集は、「多くの人を愛し多くの人に愛された」士郎さんの『瓢々録』を執筆された方の中から、特に4名について紹介します。

東に筑波西に富士

士郎さんが亡くなられて間もないころ、山岡荘八さんが母の墓を建てようと春秋苑(川崎市多摩区南生田にある共同墓地)へ行き、気に入った空地を選んでみると、なんとそこは士郎さんが生前に選んだ場所そのものであったようです。そこはいちばん高い山の上で、北から南へ風が吹きぬけ、東に筑波、西に富士の見わたせるところでした。しかし、冬は北風がはげしくあたるので、妻清子さんが寒かろうからと、風のあたらない場所に替えたそうです。山岡さんは、いずれ自分も入る墓を士郎さんが最初に選んだ場所に決めたことを、何とも妙な、なつかしい因縁に感じたそうです。

春秋苑は、士郎さんが墓碑銘を記した、かつてのフィリピン従軍中の司令官であり、戦後「バター半島死の行軍」の責任を問われ、極東軍事裁判によって刑死した本間陸軍中将の墓がある縁の地であり、士郎さんが亡くなる一年前、頼まれて自身の文学碑を建てた景勝の故地です。次に、その文学碑を記します。

去る日は楽しく
来たる日もまた楽し
よしや哀憐あいれんの夢は儂はかなくとも
青春の志に湧きたつ
若者の胸は曇るべからず



尾崎士郎文学碑の碑文(春秋苑)

昭和21年『去る日 来たる日』を出版したとき、その帯にこの言葉が印刷されていたそうです。

なお、この碑文は吉良町立図書館の玄関脇にも建っています。

※山岡荘八：小説家。明治40年(1907)生まれ。士郎さんとは昭和13年ごろからの知り合いで、時代小説において合い通じていたようです。

名付け親



『去る日 来たる日』(昭和21年発行本)表紙

俳優宇津井健さんは、昭和34年士郎さん原作の映画『雷電』の主役ぼってきに抜擢されました。以後、士郎さんの知遇を得て、媒酌人、長男りゅう隆くんの名付け親までお願いするお付き合いになっていました。士郎さんは、また宇津井さんの後援会長までつとめるという身の入れようでありました。

平成10年11月15日、宇津井さんが吉良町を訪れました。その時町公民館にて上述した「去る日 来たる日」の一文を朗々と暗誦あんしょうされました。宇津井さんが一番好きなのが、この言葉だったそうです。

宇津井 健

「人生劇場」のころ

なか がわ かず まさ
中 川 一 政

中川画伯は、士郎さんが亡くなられる2、3ヶ月前より週刊誌に連載されていた士郎さんの随筆の挿絵をかいていたそうです。随筆は、士郎さんの病状が悪化したため、原稿ができなくなり、13回で終わったそうです。そのときの士郎さんの随筆は生死の境を往来した事を書いた序文であったようですが、2回目あたりからは、まるでそんな事を忘れたような、士郎さんの笑顔が思い浮かぶ場面ばかりであったそうです。



『厭世立志伝』表紙

中川画伯は作者（小説家）と挿絵画家は大夫（歌舞伎・文楽などの謡い手）と三味線ひきの関係であると言っています。大夫を引き立てて、大夫がはたらいている時は影になり、大夫がはたらかない時ははたらくという気合いのこのようです。人生劇場の挿絵を見ていると、まさにそのように思われます。画伯が描いた士郎さんの小説の挿絵は、人生劇場を中心に800枚にも及んだそうですが、人生劇場の場面が戦場になったころ、自分の仕事の難関にぶつかり、挿絵を描いている暇がなく、戦場を知らないという理由で断わることになったそうです。その後も、士郎さんが決心して何か書こうとするたびに挿絵を頼まれたそうですが、描けなかったそうです。それが、突然、士郎さんからこのたびはどうしてもかいてくれと電話がかかって、焼け木杭に火が付き引き受けた。それが士郎さんが久々に意気込んで筆を執り昭和32年に発行した『厭世立志伝』だったそうです。

画伯は『瓢々録』の自筆の末尾に、次のように書いています。

人生劇場で吉良常が酔っぱらって、瓢吉に、小説家なんてけちくさい、若旦那、大説家になれ、と言っている。

これは吉良常の酔言とばかりは言えない。尾崎君にそういうところがあり、壮心勃勃たる意気があり、皆に愛され慕われたと思う。

今は冥福を祈る。



『厭世立志伝』挿絵

※中川一政：画家。明治26年（1893）生まれ。油絵具・岩絵具・水墨を自由に駆使して、独特な文人画の世界を洒脱な筆致で描く。士郎さんの著書『人生劇場』『厭世立志伝』『石田三成』などの挿絵をてがける。

「尾崎選手」

お ざき ひょう し
尾 崎 俵 士

長男の俵士さんによれば、士郎さんは東京オリンピックの宣伝のため、完成したばかりの聖火台に向け、片手に聖火を持って半パンツにランニングシャツ姿の写真を撮ったそうです。士郎さんは「おい俵士、おもしろい写真を見せてやるから、お母さんには内緒で、ちょっと来い」と俵士さんにニヤニヤと照れくさそうに見せたそうです。



『人生劇場』（青春編）挿絵

しかし、その愉快的な尾崎選手の写真も士郎さんが亡くなられた後は寂しい父への思い出の一つと変わってしまったと綴られています。

士郎さんは亡くなる何日か前に俵士さんに詩のようなものを口授されたそうです。次に俵士さんが筆記されたものを記します。

ざんむきえつくしていちまつに残るところなし、
人生のこうようここにことごとく終わる、
ただ人情を知ってこれに及ばず、
ただむくいるあはざるを悲しむのみ。

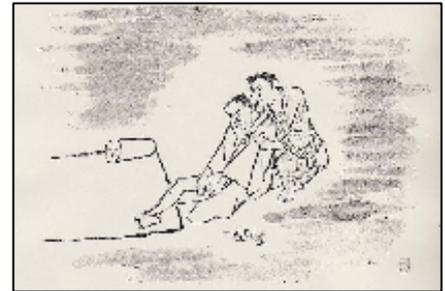
『小説四十六年』において高橋義孝氏は、仮名を漢字に直すと、恐らくこうなるであろうと記しています。

残夢消え尽して一抹に残るところなし、
人生の興行ここに悉く終わる、
ただ人情を知ってこれに及ばず、
ただ報いる能わざるを悲しむ而已。

高橋氏は「人生のこうよう」は俵士さんの聞き誤りであって、士郎さんは「興行」と言おうとされたのではないかと書かれています。士郎さんの相撲好き、『人生劇場』の「人生」から察し、「人生の紅葉」ではどうもぴたりとしない、「紅葉」が「悉く終わる」というのもおかしい。ここはどうしても「人生の興行」でなければなるまいと述べておられます。

最後に俵士さんは「人生劇場の一節より次の言葉を借用して、尾崎士郎の死というものの僕の解釈としたい。」と語られています。

何となれば、人生の最後の線までがんばりとおして彼は、完全に生きぬいてきたからである。彼は断じて死を速めたのでもなければ人生に敗北したのでもない。彼は戦いつくしたのだ。



『人生劇場』（青春編）挿絵

「瓢々録 -士郎回想-」特集の展示品目録

①書籍	(『瓢々録』)	2点
②同上	(『去る日来る日』初版本・昭和21年発行本)	各1点
③同上	(『厭世立志伝』初版本)	2点
④同上	(『人生劇場』青春編初版本)	1点
⑤書籍原版	(『瓢々録』目次・尾崎俵士)	各1点
⑥書籍原稿	(『瓢々録』中川一政)	1点
⑦写真	(『瓢々録』挿絵・写真)	各1点
⑧同上	(春秋苑「去る日来る日」の碑にて等)	2点
⑨同上	(「結婚披露宴」宇津井健)	1点
⑩写真(ホスター)	(東京オリンピック宣伝用)	1点
⑪色紙	(「去る日来る日」詩碑 愛知県立岡崎高等学校創立90周年記念)	1点
⑫同上	(宇津井健自筆サイン)	1点
⑬同上	(士郎さん辞世の詩 士郎さん死の数日前俵士さんへ口授)	1点
⑭掛け軸	(" 永井柳青書)	1点
⑮版彩画	(『人生劇場』中川一政)	2点
⑯挿絵原稿	(")	2点